

にふれ、智恵のしぐれに会う様にまで、まことに不思議な色をそえ、次第に弥陀にそまる様になるのは、法然上人の真の姿なのである。

大我の研究

(近世の浄土宗に於ける信仰運動批判)

山 田 啓 隆

江戸時代における浄土宗は、幕府の優遇と政僧の活躍によつて寓宗的地位から先進諸宗の班列に加わり得る教団にまで発展した。

しかしこれはあくまで制度乃至組織として教団であつて、法然の意を汲む専修念仏の同信同行的信仰教団としてではなかつた。しかも内には、徳川家との師檀関係の緊張を如何にして持続するかという問題と色衣をまつて貴紳に近づかんとする世俗化とそして檀家制度の確立によつて、僧侶は著しく墮落したのである。

特に浄土宗の場合、致命的であつて、所謂法然の専修

念仏の喪失という問題をかゝっていたのである。

その中にあつて、二種の信仰運動、実践運動が教団の下層部に、しかも地方から勃興してきたのである。

一つは当時の寺院が俗化しているのを慨歎して俗塵のいたらない静閑の地に道場を設けて、仏制を守り念仏修行に専入して、もつて宗祖の恩に報いんとす運動——捨世派

いま一つは僧侶にして戒律を守るものが少く、著しく僧風が墮落してきたのを慨歎して、とくに仏制の律義を復興せしめんとした運動——興律派とがある。

前者は新念仏運動であり、後者は念戒一致と云うべくともに理論でなく実践である。しかも捨世派は形式的に教団の確立が進められてきた時期に発生し、興律派は教団が安定し僧侶の生活もようやく安逸放墮に溺れてきた時に興つてきたのである。そしてこれらの信仰運動はその発生よりみて、宗門警覺の意義があると考えられる。

捨世派の新念仏運動は戦国末の称念より始まり、数多くの学僧の中で無能の如く持戒念仏の興律の僧もあつてとくに仏制の律儀を復興せしめんとする運動とも接近し

きた。

さて大我は、普寂及びその徒と云つてゐる興律派の人々に對して

一、普寂及その徒は比丘と称するが比丘でなく、如来隨宣の意趣を知らずして、諸經の相違過失を探して諸法の中において心疑つて信ぜず、自ら知る處を以つて他の經法を非としてゐるが、これは諸仏を毀謗するものであつて、地獄に墮すべき仏敎敎祖讎である。

二、盲、蛇に畏れざるが如く、漫りに略疏を讀して以つて玄趣を晦り、泥を金屏に塗つて妙画を失うに似たり、の行爲をするものが多い。

三、普寂及その門人達は、淨土經大釈義に墮順しない等々をあげて批判している。

しかし普寂等の興律派の動きは、もともと敎團の下層部からおこり、心ある僧に支持され、とかく世間に背を向けようとした形式主義敎團を、一般社会から全く浮び上らせてしまわない役割を果してきた点は、革新的な性格をもつていたと十分に認められるのである。

しかし、こゝに注意すべきことは、如法修行したとは云え、大我の考えは余りにも官学を中心とする檀林のであつて、すべてこれは天下国家のためであるとしてゐる。

勿論宗学においては、普寂の如く華嚴思想を以つて天台に同せしめることなく、よく諸法実相の玄底を叩き得た。その故に絶対他力の眞宗敎團から脱して、専修念仏の淨土敎團に帰入した契機は、即ち実践行爲にあるのであつて、実践を重じたる結果、漸修的な態度を外にしては何らの法門をも認め得ないと云う事もなかつた。

しかし檀林敎学派の反動として、在野において活潑に展開されてきた反檀林敎学活動の一端としての、普寂を含めた興律派の活動も、惜しむらくはその運動がともすれば、時間的に雨垂れ式で、空間的には局地的であつた爲に、組織的な成長をとげることもなく、且つ敎團の体質を改革するような勢力にまでいたらなかつたが、しかし敎團の末端部にあつて、一般社会と關係をもちながら、淨土宗の庶民性をなくさないようにした点は、近世淨土宗を深ぐる上において注目しに値することがらである。